

一年間を振り返って

大阪市立長吉西中学校

中平 貴士

私にとっては初めての特別支援学級担任としての1年間が終わろうとしております。淀商業高校福祉ボランティア科で3年間の講師経験を経て、特別支援学級の担任となりました。

中学生との関わり、特別支援学級在籍生徒との関わりに胸が高鳴るスタートをきりました。担当学年は1年生でした。コロナの影響で中間テストが無くなり、期末テストまでは「入り込み」の支援で様子を見ました。

担当生徒ひとりひとりと対話を重ねて、通常学級とのつながりを大切にしつつ、支援ルームでの対応に配慮をしながら進めていきました。2学期より「抽出」の授業が始まり、どのような支援が生徒にとって一番良い方法なのかと悩む毎日でした。先輩教員や同僚、また研修で知識を得て、1年が経つことには、自分の中で目指すものが見つかりました。

学んだ知識の中から、2つの事を大切に過ごしました。

ひとつ目は答えを見せる、伝えるのではなく、どうしたら自立につながるかを考えて対応するという事です。生徒は特にひとりひとりが違ってきます。しかし、自立に向けてという部分はこれからの人生を歩んでいく上で必要不可欠な事なので、一番に考えるようになりました。研修で学んだ「インクルーシブ＝みんな違ってみんな良い」という部分を大切に、ひとりひとりに合わせた関わりを目指しています。ふたつ目は、保護者へ「子どもの変化を言葉にできる事」が大切だということです。学力の定着に課題がある中、「生徒が報告、連絡ができるようになった。」「挨拶ができるようになった。」など細やかに成長を伝える事が信頼関係につながると考えます。長吉西中学校では、電話での対応、連絡帳、学習用端末を用いてコミュニケーションを図っております。

研修では支援の楽しさは、自由度が高い所、普段の学校生活をどのようにして自立活動に繋げる事ができるか考える事と教えていただきました。その為には学級担任、保護者、特別支援学級担任と密にコミュニケーションを図り、生徒の困り感を早期に見つけて共有し、学校全体でサポートできる体制を整えていかなければならないと考えております。10年間の社会人経験、高校での講師経験を活かして担当する中学1年生たちとまずは、3年間学び続けたいと考えております。

特別支援学級の支援教育の楽しさ、むずかしさ

大阪市立長吉西中学校

名越 慎太郎

私は、肢体不自由の特別支援学校で3年、中学校の特別支援学級で6年、特別支援教育に携わってきました。その中で、障がいのある生徒、保護者の方と関わらせて頂きました。今日は特別支援教育をやってきてよかったこと、大変だったことをまとめました。

特別支援教育に携わってきて感じた楽しさ、良さ、やりがい

- ・障がいのある生徒、困っている生徒の支援・指導。
- ・指導をする中で、生徒が達成感を持って、前向きに学習に取り組めたとき。
- ・コミュニケーションが苦手な生徒の笑顔が増え、生徒間の会話が生まれたとき。
- ・チームで生徒理解と手だての共通理解ができ、生徒の通常学級での学びを増やすことができたとき。
- ・生徒・保護者から感謝の言葉を伝えられたとき。

特別支援教育のむずかしさ、苦勞していること

- ・生徒・保護者と折り合いがうまくいかなかったとき。
- ・通常学級担任・教科担当との連携、特別支援チーム間の連携。

私の経験を簡単に振り返ってみました。すると、やはりこの仕事はコミュニケーションスキルが非常に求められる仕事だなあと再認識しました。なんといっても、生徒・保護者・通常学級担任・特別支援学級担任と、それぞれの意見や思いを尊重する中で、生徒一人一人にあった最善の支援教育を提供していかなければなりません。楽しさ、やりがいよりも、苦しみが大きくなることも正直ありました。実際頭を打っては学びの繰り返しで、現場での経験を積んでいるといった状態です。しかし、障がいのある生徒、保護者をサポートしていきたいという気持ちが自分の中にあり続けていることは幸いでした。特別支援学級にはさまざまな課題がありますが、「その子にとって、将来を見据え、どうしていくのがよいか」という視点を忘れずに、生徒の教育環境づくりに努めていきたいと思えます。